

京都帝国大学農林経済学教室 調査・作成

DVD版

一九二七〜一九三三（昭和二〜八）年 全314冊

農家経済

調査簿

昭和恐慌期の農村家族

農家経営と消費生活の実態に迫る

第一次資料をDVD版にて復刻！

仕様 ▼ DVD-ROM版・全6枚＋別冊1

野田公夫（京都大学大学院農学研究科教授）

水田隆太郎（京都大学大学院農学研究科大学生）

解説 ▼

揃定価 ▼ 本体二八〇、〇〇〇円＋税

刊行 ▼ 二〇〇六年十一月刊行

不二出版

農民家族の経営と生活を再現しうる世界的にも貴重な資料群

野田公夫 〈京都大学大学院農学研究科教授〉

私たちの教室には、戦前期に実施された、大別すると二つの農家経済調査個票が所蔵されている。一つは農林省が帝国農会に委託して実施した「農家経済調査個別原票（自大正二〜四年度・自大正二〇〜昭和二三年度）」であり、二つは当教室（直接担当したのは京都帝国大学農学部農林経済調査室）が実施した「農家経済調査簿（昭和二年度〜）」である。後者はさらに、橋本傳左衛門教授が中心になって実施した初期（昭和二〜八年度）のもの、大槻正男教授が考案したいわゆる京大式簿記によるもの（昭和九年度〜）に分かたれる。今回の刊行対象は、当教室が実施したものうち橋本教授を中心にした初期のもの、昭和二〜八年度分・合計三一四冊である。

この「農家経済調査簿（昭和二〜八年度）」の特徴は、まだ簿記様式としては整備されておらず、ともかく「毎日の経営と生活の動きを細大漏らさず記録する」ところに主眼がおかれたことである。農業簿記としては未熟であったことが、かえって「ほとんど加工されていない生データ」を豊富に残すことになり、「農民家族の経営と生活を可能な限り豊かに再現したい」「そのうえで多様な論点を引き出したい」という私たちにとっては、他に並ぶものがない「情報の宝庫」となっている。本パンフ左頁の「農家経済調査簿の構成」に記載された諸項目とともに、毎日欠かさず記された日誌には、モノ・カネの動きとともに家族一人一人の動きが丹念に記されている。農村・農家を対象にした、経営史・経済史・技術史および家族史・社会史・生活史など広範な諸領域において活用を待たれる貴重資料群である。また、調査対象時期は、世界恐慌前・世界恐慌下・恐慌回復過程にあたる。世界大恐慌の意味を農家レベルで再考するうえでも格好の資料となろう。多領域における活用を期待したい。

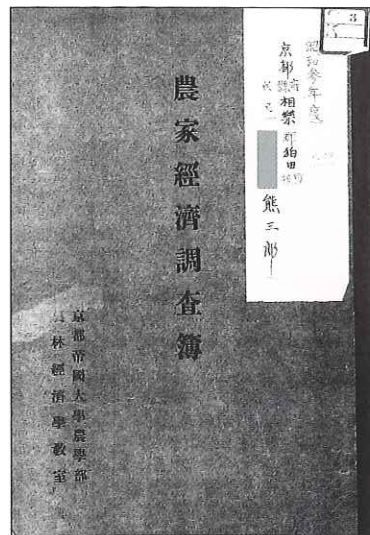
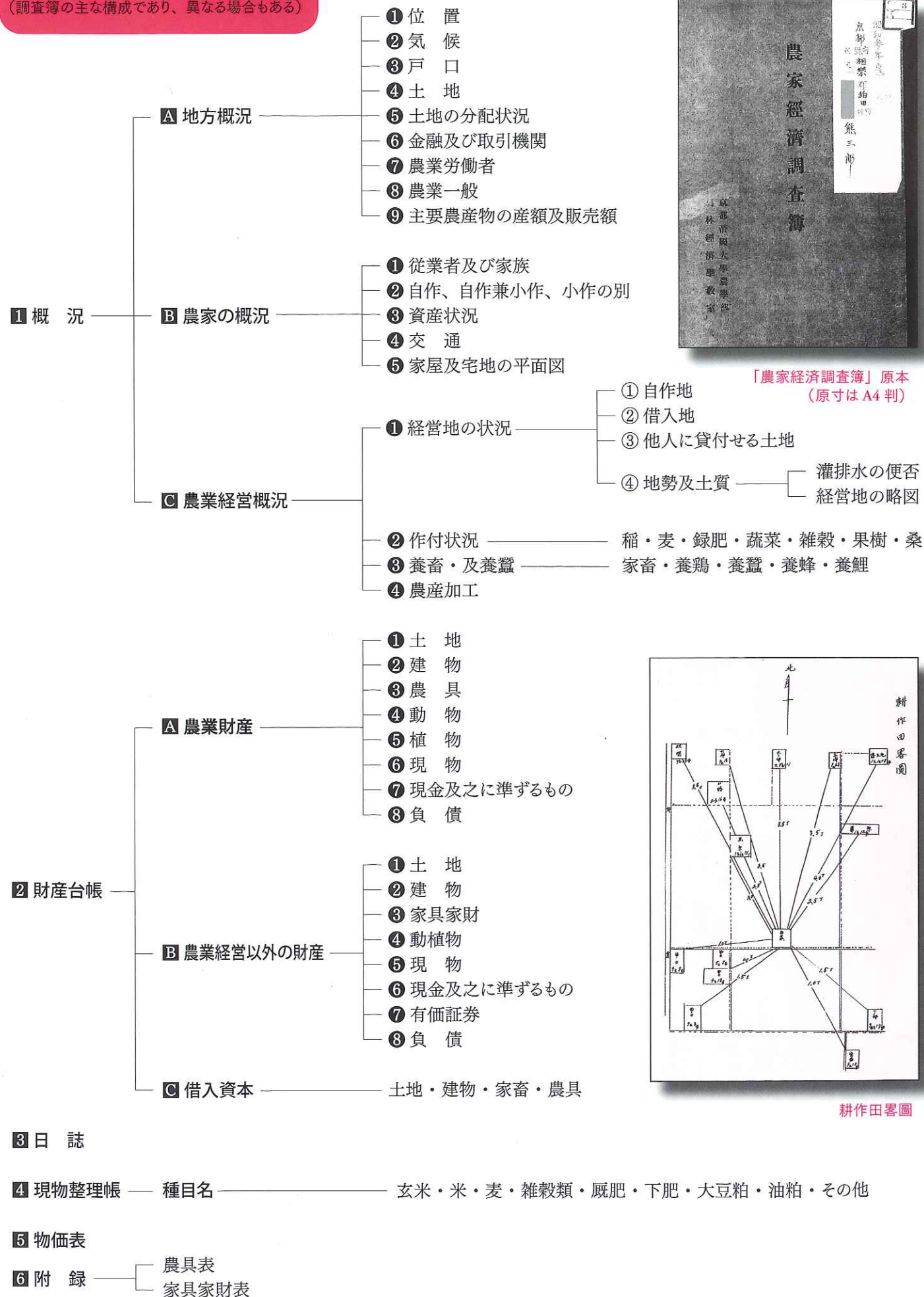
「群」としてとらえ、「流れ」として追う！

本資料の豊富な特徴

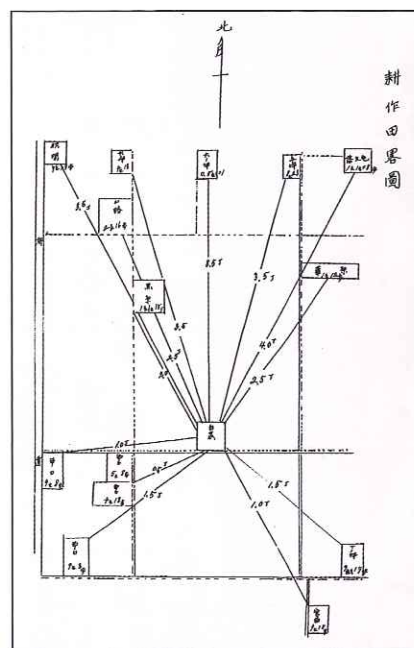
- 調査は「経済調査」となっているが同時に「生活調査」としての性格が強く、農家の労働・生活実態の網羅的な把握が可能。
 - ① 娯楽（活動写真、旅行など）・冠婚葬祭・入学・卒業・集会（頼母子講、講演会）等の詳細な農家記録である。
 - ② たとえば雇い人に布団縫いをさせたり、自家用に調味料を作成する記録から衣食住の具体的な姿が浮かび上がる。
 - ③ 詳細な購入品の記録から農家の消費水準を知ることが可能。
- 同一調査簿による大規模調査であるから地域間・階層間の比較が可能。
- 家族単位の記録であるから家族間の分担の様相がわかる。
- 農会により選定された経営意欲のある農家の記録であり、記述内容の精度が高い。
- 日単位の継続調査であるがゆえに以下の事がわかる。
 - ① 毎日の労働、金銭の流れの詳細な情報が把握可能である。
 - ② 天候による農家の生活の違いがわかる。
 - ③ 季節による農家の生活の違いがわかる。

農家経済調査簿の構成

（調査簿の主な構成であり、異なる場合もある）



「農家経済調査簿」原本
（原寸はA4判）



耕作田畧図

待望の資料群

岩本純明 〈東京大学大学院農学生命科学研究科教授〉

農家経済調査は、農業・農村史研究者がまず第一に参照すべき資料である。これまでは官庁統計の農家経済調査が主に利用されてきたが、提供されるデータが基本的に集計値であるため情報量は限られていた。これに対し今回刊行される「調査簿」は、調査内容がきわめて豊富であることを特徴とする。その中核は世帯員別に日々の作業を記録した「日誌」であるが、記載される作業は農作業にとどまらず兼業・交際・家事等のすべてに及んでいる。また、「現物整理帳」の農産物処分に関する記載は農家の商品化対応の実態を教えてくれるし、肥料項目の記載からは、施肥技術に現れた当時の生産力水準を知ることができ、戦前期日本農業の重要な転換点となる昭和恐慌期をカバーしていることも本資料の魅力である。継続調査されているサンプル農家が少なくないので、昭和恐慌への経営対応を個別農家レベルで検討することも可能であろう。本資料の刊行によって、戦前期日本の農業・農村史研究が一段と深化することを期待したい。

農家に隠された秘密をとく鍵

大門正克 〈横浜国立大学経済学部教授〉

京都大学農学部を訪ね、戦前の「農家経済調査」の原資料をはじめてみたときの驚きは忘れることができない。農林省や京都大学農学部が指定した全国各地の農家が、日々の労働や経営、消費の様子を具体的に書き込んでいる。その「調査簿」をたどるなかで、農家については未検討の領域が広大にあり、今までは農家のあり方の一側面しか理解してこなかったのではないかという思いを強くもった。

たとえば、米麦作に養蚕や果樹・蔬菜を組み合わせた農家については、これまで農民的小商品生産論として主に地主的土地所有との関係を議論してきた。だが、「調査簿」のなかの家族構成員ごとの記録からは、新しい作物の導入が家族構成員の労働と生活を変化させる側面が浮かんできた。農家の構成員は労働と生活のバランスをどのようにとりながら経営を成り立たせようとしたのか、とくに従来ほとんど光が当てられなかった農家の女性は、労働と生活をどのように分担したのか。農家はごくありふれた存在のように見えるが、私たちはまだその一部を知っているにすぎない。「農家経済調査簿」には農家の秘密をとくための鍵がいくつも含まれている。鍵をみつけれられるかどうかは「調査簿」を読む私たちの目にかかっている。「農家経済調査簿」の復刻を機に、新しい鍵を用いた農家論が登場することを期待してやまない。

日常の中に潜む体系性を 探るために

香月洋一郎 〈神奈川大学経済学部教授〉

日々あたりまえのことをあたりまえのこととして支える構造を生活文化という。等身大の人間をとりまいていく多くのものは、なしくずしに続く日常的な実務や雑事であろう。それらは断片的に存在する限りにおいては文字通り生の断片にすぎない。しかしそれを群としてとらえ、流れとして追うことでその底にある切実な枠組みが浮き彫りになる。

『農家経済調査簿』は、そうした作業への触発力豊かな資料であろう。そこで探り得る構造は切実なゆえに、限界と可能性とが表裏一体となつて存在している。だからこそ過去を見ることで、今とこれからを考えることができる。ことにこの資料の中に展開するのは、数字という精妙なフィルター個性である。それは何よりも、向きあう私達の洞察力や把握力を試すものになろう。

また、この調査簿の欄を自らの手でひとつひとつ埋めていった人たちは、あるいは、漠然とわかっているつもりという状態と、正確に把握するという行為との差を明確に体験されたのではないかと思う。そのことがそれからどのような力となったのか、そうしたことを知りたいとも思う。

こうした資料の公開を喜びたい。

農家世帯における

家族労働の実態をあぶり出す

小山静子 〈京都大学大学院人間・環境学研究科教授〉

近代家族が登場することによって、「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業が成立した、とはよくいわれることである。では、このような性別役割分業が存在していない家族において、一人一人の家族成員はどのような働き方をし、日々を過ごしていたのだろうか。そこにジェンダーと世代に基づく分担構造が存在していたことは容易に想像できるが、その実態となるとなかなか分からないのが実情である。

この困難な課題にいかにして迫っていくのか。その手がかりを与えてくれるものが、今回復刻される『農家経済調査簿』である。これには、三世代にわたる家族成員や使用人たちが日々行なっていた仕事、数年間にわたって毎日、時間単位で克明に記録されている。わたしたちは、そこに描かれた濃密な生活世界を丹念に読み解くことで、判然としなかった農家世帯における家族労働のありようを、具体的な姿でもつとらえることができるのである。

農家の日々の暮らしの

実相を指し示す

野本京子 〈東京外国語大学教授〉

昭和恐慌期、財団法人農村生活改善同盟会（文部省内）は「農村生活改善指針」（一九三二年）を提示し、「農村の疲弊甚しき今日、其の生活上幾多改善を要する条件があります」（序）としている。この提言は戦時下の農村生活改善の提唱へと接続していくのだが、この時期、実際の農村生活はどのようなものだったのだろうか。個々の農家における日々の暮らし、とりわけ消費生活は記録としてはなかなか残らず、「貧しかった」といったようなレベルにとどまりがちであった。

今回復刻される『農家経済調査簿』には、各戸の毎日の収入と支出が記されており、当時の生活の諸相を知るうえで大変貴重な資料である。調味料や副食物そして嗜好品（煙草）等の購入状況のほか、農繁期の雇人への食事代の支給額や「長男小遣い」等も記されており、まことに興味深い。また備考欄には祝祭日にもなう休業や遠出等についての記載もあり、昭和恐慌期の農家の暮らしの実相を示すまさに好個の資料といえよう。

農民の「家」研究の宝庫

細谷 昂 〈農村社会学者〉

この「農家経済調査簿」には、農民の「家」のメンバー一人一人の毎日の行動が、それぞれの家族内地位ごとに、克明に記録されている。農繁期、例えば田植の時期に、夫は何をしていたか、妻は何をしたか、跡継ぎの長男は、その妻つまり「嫁」は、雇人は、などなど。農業労働だけでなく、家事や、慰安旅行や、冠婚葬祭などの生活行動も記録されている。それに、こうした日常生活に伴う諸費用が明らかにされるのも面白い。昭和戦前期だが、結構魚も買って食べているようである。田植酒はどのも同じだが、味醂を購入していたりして、当時の農村としてはかなり水準が高いのかもしれない。日本農村社会学の成果として、これまで農民の「家」について多くの研究が積み重ねられてきた。しかし、「家」のメンバー一人一人の行動に即して、具体的に明らかにすることは、資料の制約から簡単ではなかった。この調査簿は、まさにそのような、家の生活の内面にまで立ち入った研究を可能にする資料の宝庫といえよう。

以下の内容見本は昭和三年度・京都府相楽郡粕田在住のT・K氏家族の日誌を抜粋したものである。
農家の一年を追ってみる。(家族構成は14頁を参照) ▼見本は原本を93%に縮小しています。

天候		日 / 月 3		種目		摘		要		主		妻		馬牛		現		物		出		納		現金		出		納			
曇		1		家		加		加		菜		畜		畜		1		1		1		1		1		1		1		1	
備		考		家		製		製		甘藍の定植も行ふ		養		養		養		養		養		養		養		養		養			
先午前中、氏神へ参拝。午後、加藤村水戸町木匠村山の境界、新井幸三と相談あり。		卯と受入る		2		7		4		4		1		1		1		1		1		1		1		1		1			
		二月三日買入		4		5		5		5		5		5		5		5		5		5		5		5		5			
		鶏の飼料代を拂ふ		畜収		加収		加収		加収		加収		加収		加収		加収		加収		加収		加収		加収		加収			
				一初		二初		三初		四初		五初		六初		七初		八初		九初		十初		十一初		十二初		十三初			
				三六〇		三五〇		四〇〇		四〇〇		四〇〇		四〇〇		四〇〇		四〇〇		四〇〇		四〇〇		四〇〇		四〇〇		四〇〇			

内容見本③

七月二十五日
田植えは終り、水田の除草を一家総出で行った。その後、長男は青年訓練所へ行き、戸主は頼母子講へ出かけた。頼母子講の掛金は二十三円。この日肉鶏「一メ六〇〇匁」を六円四〇銭で売却している。

五九
八四

8

内容見本④

種刈りの前、長男は排水溝を掘った後、映写会に出かけた。五男は京都へ卵を持参。夕食のおかずは鯖。行商人から三尾六〇銭で購入した。

十月は七円六〇銭の定期預金をした。

Q

内容見本⑤

[illegible]

十二月三十一日から一月一日
大晦日は正月を迎えるにあたり農家家族は家事に多くの時間を費やしているが、このような多忙な目でも、農学校生である五男や六男は労働を免除されているのも興味深い。

正月一日、農事は休み。戸主と長男は小学校で四方拝奉式に四時間かけて参列した。

十二月三十一日から一月一日
大晦日は正月を迎えるにあたり農家家族は家事に多くの時間を費やしているが、このような多忙な日でも、農学校生である五男や六男は労働を免除されているのも興味深い。

正月一日、農事は休み。戸主と長男は小学校で四方拝奉式に四時間かけて参列した。

内容見本⑥

二月十二日
戸主は柴刈りに八時間。長男
は麦田へ追肥、妻は縄をない、
嫁は鹿の子絞りに七時間の作
業をしている。
鋸の目立て、木綿機の修繕を
施した。

三八五
六八

障子紙代・自轉車修繕代：

種目	摘要	作業時間		現物		納金		現金	
		主妻	子孫	数量	金額	数量	金額	収入	支出
家	鶏舎の壁を塗り	(9)	(9)						
家事 (第期支拂)		10	1						
祝賀金 家へ支拂	(家計用)								
祝賀金 家へ支拂	(家計用)								
僧防山陰伊勢店へ	(家計用)								
障子紙	(家計用)								
原田より助へ	(家計用)								
自轉車修理代	(家計用)								
炊野金綱店へ	(農用)								
雞舎用金綱代	(農用)								
新り鉄力店へ	(農用)								
有難用 飲水器	(農用)								
九月十日 九月九日 九月八日 九月七日	(農用)								
電燈料 式月分	(家計用)								
僧防山陰伊勢店へ	(家計用)								
大鉄柄の修理 中具	(家計用)								
塩漬高綿 中具	(家計用)								
支拂	(家計用)								
久保田増吉 中具へ支拂	(家計用)								
酒代 塩漬高綿 中具へ支拂	(家計用)								

二月二十八日

日誌は二月末日をもって終る。

この日は新調した鶏舎の壁を塗った。

また、この日は節期の支払日でもあった。

家計用に奴傘、障子紙、自轉車修理等の料金を支払い、農用に鶏舎の金綱、鶏を育てる飲水器、大鉄柄の修理の料金を支払ったことがわかる。

各々の金額が明示されていて、当時の農家の状況が克明になる。

[illegible]

毎日の経営と生活の動きを細大漏らさず記録した〈情報の宝庫〉

農家経済調査簿

京都帝国大学農林経済学教室 調査・作成【昭和二年～昭和八年・全314冊】DVD版

京都帝国大学農学部農林経済学教室は近畿五府県の農家を対象に生活経済調査を行った。

調査対象は一〇四世帯。調査簿総冊数は三二四冊。総頁数は十五万頁。

各冊の構成は財産台帳・農家の概況・日誌・現物整理帳であり、附録として農具表・家具家財表を収録。

本資料の中核を占める日誌には、各農家の家族（戸主・父母・妻・長男や次男・嫁・使用人）の労働の役割と時間、現物出納と現金出納が克明に記載されている。

農家経営と消費生活が一体となった戦前農家の膨大な調査記録をDVD版にて復刻！

原本▼京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻所蔵
体裁▼DVD-ROM版・全6枚＋別冊1

ISBN4-8350-5280-3

別冊▼収録内容一覧＋解説

解説▼野田 公夫〈京都大学大学院農学研究科教授〉
水田隆太郎〈京都大学大学院農学研究科大学院生〉

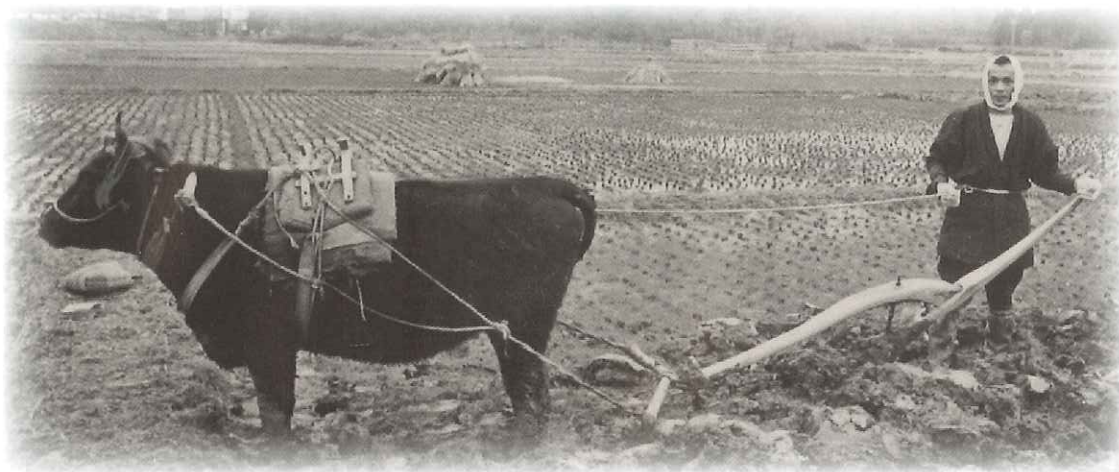
揃価格▼本体二八〇、〇〇〇円＋税

刊行▼二〇〇六年十一月刊行

推薦▼岩本 純明〈東京大学大学院農学生命科学研究科教授〉
大門 正克〈横浜国立大学経済学部教授〉
香月洋一郎〈神奈川大学経済学部教授〉
小山 静子〈京都大学大学院人間・環境学研究科教授〉
野本 京子〈東京外国語大学教授〉

細谷 昂〈農村社会学者〉

本商品はマイクロフィルム版（特別受注製作）でもご用意できます。
詳細はお問い合わせ下さい。



DVD版『農家経済調査簿』の利用ご案内

① ご使用のパソコンの条件について

本資料のファイルは、PDF形式で作られています。これは無償のビューアソフト「Adobe Reader」でご覧になれます。従って「Adobe Reader」がインストールできる環境であればすべての機種で利用が可能です。

（Macintosh, Windows, Linux, Solaris 全部の利用が可能です）

② 特に推奨する動作環境

対応 OS：Windows2000, XP 日本語版

CPU：Intel Pentium 800MHz 以上（PentiumIII 以上）

実装メモリ：256MB 以上（128MB 以上）

HD 空き容量：200MB 以上（Adobe Reader のインストール時）

ディスプレイ解像度：1024 × 768 ピクセル以上

DVD ドライブ：2 倍速以上

本パンフの写真は、中村 治 著『あこのろ 京都の暮らし——写真が語る百年の暮らしの変化』（世界思想社 刊）所収のものを関係者の許諾を得て使用させていただきました。記して感謝いたします。
また、使用写真は昭和戦前期のイメージ写真であり、本資料との関係はありません。

不二出版

〒113-0023

東京都文京区向丘一丁目二二

TEL 〇三-三八二二-四四三三

FAX 〇三-三八二二-四四六四

振替 〇〇一六〇二-九四〇八四

*表示価格はすべて税別